

縮刷版『国民国家とナショナリズム』

私にとって七番目のこのエッセイを書き上げたのは二〇〇五年一月。読んでくださった人がいるとしても、趣旨のはっきりとしない文章には辟易したに違いないと冷汗が出る思いである。でもこれは、私には必要な文章だった。それは私が「歴史社会学」というものに始めて向き合い、まあ、自分にしか通用しない一人よがりの「学」だったとしても、その書き方の作法を見つけたときだったから。

お恥ずかしい話なのだが、私は自分が見つけたものに酔っていた。読み返してみて、いっていることの内容がバラバラで、ただトピックを得意気に並べるだけで、どう繋がるかの説明が足りない。結局、私はここで自分なりに見つけた「社会学」というものを語っているのだが、せっかく「国民国家とナショナリズム」というテーマを差し出しているのに、独りよがりな文章を長々と書いていただけだった。あれから五年経って、やっと少し整理をすることを思いついた。だからこれは縮刷版というよりは、訂正版みたいなものである。

このエッセイにかぎらず、「近代国民国家としての日本」が私のテーマであることはずっと変わらない。当然、そこに生まれるナショナリズムにも関心がある。このエッセイでは、私は「国民国家」、英語でいえば「ネイション・ステイツ」にさまざまな面からアプローチを試みたいと思ったのであった。

「ステイツ」と「ネイション」はともに国家を現す語だから、二つ重ねるのはおかしい。それは日本語の「国民国家」でも同じである。国家のなかに住んでいる人はみな国民だから、わざわざ重ねて言う必要はない。実は、この重ね合わせには近代国家にまつわる特有な意味

があるのだ。「ステイツ」は支配のための権力機構を指し、「ネイション」は政治社会を構成するメンバーの総体を指し、共同体としての国家を意味する。「国民国家」と名実ともに呼ばれるためには、国民が一つの国家のもとに支配されているという住民の合意が必要で、それはつまりその国に所属する人びとの間に国民的な一体意識が共有されているということである。この定義は、もって回った言い回しに聞こえるけれども、正しいことをいっている。だがそれは、同じ文化、同じ言語、同じ人種で構成される一国民が一国家を形成しているという意味だから、古代から現代にかけてずっとそう思ってやってきた日本人にしてみれば当たり前なことだった。でもちょっと考えてみれば分かるが、純粋にそんな国が存在したことは一度もなかった。げんに単一国民国家とされる日本にも、異なった文化をもつ在日韓国人が日本国民として住んでいるし、その前に、昔の日本人はほとんど国家というもののさえ意識していなかった。

「ステイツ」は国家の制度の立場でいわれていて、そこに住んでいる人びとの違いには関わらず、市民権（公民権）を持つ総ての国民を法のもとに平等に扱う機構が意味されている。それに対して、「ネイション」は、文化的あるいは民族的な意味合いを含んだ言い方である。ただしそこにはもっと微妙な問題が絡んでくる。人種はどうしようもないけれど、文化・生活習慣・言語はある程度つまり国民としての一体感を失わない程度には共有されるのが「ネイション」が国家と同一視されるための最低限の条件である。しかしながら、この条件は絶対的なものではないのだ。雑多人種が集まっているアメリカ合衆国を見れば、事情がはっきりする。国民と国家が一体になるという意味での「国民国家」は、実際には、雑多でバラバラな人びとの集まりで、いろんな矛盾を抱え込んでいる。いってみれば、人種などによる

差別を放置しながら「国境をもった領土のなかで、法と暴力手段（警察と軍隊）でもって独占的に支配している制度的な統治形態」にすぎないものである。国民国家の実態は、法の暴力がかろうじて国民の一体感を支えている部分の方が多いのである。

文化や習慣や言語は国境を越えるけれども、国籍は簡単には越えられない。私たちに国籍を棄てる決心がつかないのは、「国民国家」というものが存続する以上、どうしようもないことなのだ。

これで、いくらか事情がはっきりしてきたと思う。じつは私たちが躰くのは「ネーション」なのである。「ステイツ」は法制上の概念であるから、ヒットラーが君臨していようと、無能な総理大臣を頭に戴いていようと、法がきちんと整っていて、「国民国家」の定義の十分かつ必要な条件を満たしてさえいればそれでよい。ヒットラーが統治する国の国民は堪らないであろうが、それは運が悪いということになる。それにしても、不運な国民が多いようだけれども。

だが「ネーション」は違う。人種・生活習慣・言語などで差別されるかあるいは互いにバラバラになっている国民は、「ステイツ」を見ないだろう。国家を考えると、彼らにとって「ネーション」を取るか「ステイツ」を取るかはジレンマである。税金を納め、環境を清潔に整備してくれたり、だれかに不当に扱われたときに助けてくれたりする警察か役所があれば、それで十分だということにはならない。監視されたり干渉されたりするのは真っ平でも、同じ運命共同体に住む国民あるいは同胞として国家に関わっているという意識だけは大事にしまっておく。人びとが集まって暮らしている社会は、権利と義務というような法律の言葉だけではけっして割り切れない関係なのだ。ルールは国家機構にだけあればよいのではなく、人びとの付き合いのなかにもある。借りたお金を返さなければ、暴力に訴えられても仕方がな

い一面もあるのだ。「ネーション」はあくまでも生身の国民を扱う言葉である。だから「ネーション・ステイツ」とは、二つ（生身の人間と鉄の規律）をひっくるめた、一筋縄ではいかない私たちの現代社会の構造を狙う言葉である。

私たちはここで社会学に出会う。わけてもアメリカ人の社会学者タルコット・パーソンズの仕事に。彼は社会機構（システム）がどう機能するものかの理論を立てた。社会は人びとが集まってつくるものだが、当然、そこには目的があり、その目的を達成するための仕組みができていく。その最大のものは国家であろうが、例えば松下電工のような会社組織を考えてみればなおよく分かる。そこに参加している人びとはみな自分の役割を自覚して、それぞれの役目を自発的に果たそうとする。普通は、ドレイのように強制されてするのではなく、そのシステムがいつまでも続き、発展するという願いを共有した上での行動である。小は会社から、大は国民国家まで、このように説明されるシステムは、傍から見ると、生命体のように、壊れたところは自分で癒しながら増殖していく自己制御付装置のように見える。パーソンズが最終的に考えた社会システムは、そのような機能を備えた実体として理論化されたのである。しかもパーソンズはそれを抽象的・架空のもの（ユートピア）として考えたわけではない。彼はそれを、アメリカ社会をモデルに考えついたのだ。ただモデルになったのは、今のように壊れかかり制御機能を失くしたアメリカではなく、彼が著述を行った五〇年代から六〇年代にかけてのアメリカである。情け無用の独占資本の振る舞いを型どおりに憎んではいたけれど、パーソンズに限らず、当時世界中のほとんどの人びとが、それでもなお、アメリカ・モデルを最良のものと考えていたのは間違いない。もしユートピアというものがあるのなら、少なくともアメリカはそのいちばん近いとこ

ろにいた。パーソンズはたぶんそう信じていたのだろう。そのために六〇年代から後、パーソンズはアメリカ式資本主義の提灯持をする保守主義者とか現状維持主義者とかいわれて信用を失ったけれども、それは少しばかりパーソンズには酷な言い方である。五十年前の世界を思い返し、パーソンズの壮大な理論をよくよく吟味すれば、彼の機能理論がけっして特殊ではなく、一般にも有効であることが分かる。

アメリカに限らず、社会を構成するメンバーは次のような行動を取ると彼はいう。彼はまず生き延びるために成り行きに従い、つぎに行動の目標に向かって行動を始めたら、それをみんなで一緒にやるように強制し、最後に、出来上がった行動のしきたりを守ってはぐれ者を出さないような仕組みをつくる。社会の文化と規律はそうやってつくられ、所属するメンバーの一人ひとりがみんなで支えあう社会の統合された仕組みが、今度は、逆に集団としての人びとを縛り、そうなるべからず彼らはもはや心理的にも行動的にも同一の行動をとると見做されるのである。いってみれば、それは舞台の上のよく訓練された役者のようなものである。でも役者も人間であるからには、それを機械人形のようにやるのではない。それぞれが自覚をもち、創意工夫を凝らす、自立した個人としてその役割をこなすのだ。実際に、私たちはそのような人を立派な社会人と見做している。人と社会の関係のなかで、パーソンズがいちばん強調したかったのもまた、最後の「出来上がった行動のしきたりを守ってはぐれ者をださないようにする」という段階だった。これはパーソンズの言葉ではなく、私が勝手に推測していつているだけのものだけれども（実は私は二、三の小論文を除いてはパーソンズを読んでいない。私が行く図書館には、パーソンズについて書かれた本は腐るほどあるくせに、ご本人の本は置いてないのが実情である）、「文化システム」の段階として定義され、彼の社会システム論

でも別格に扱われる。

社会をつくる人びとの行為の動機は、功利的なものではなく道義的なものだというのは、善きアメリカ人であるパーソンズの信念であった。彼の文化システムは行為の道徳的規範として理解されるべきものである。その点でも彼はウェーバーの忠実な弟子であった。パーソンズの社会理論をアメリカだけに通用する議論だというのは正しくない。道徳と情けを売り物にしているパーソンズの「文化システム」は、はぐれ者を認めようとしない閉じられた体系であるという点で窮屈なものだったかもしれないが、伝統と文化と言語と民衆の知恵に寄りかかるハーバーマスの「生活世界」だってそれよりも優れているとはいえないだろう。少なくとも、人情と伝統を背に、普通の人びとの間の自由な討論によって新しい物事を開く可能性を秘める「文化システム」も「生活世界」も、身勝手な王様とお役人とお金持にだけはそこに顔を出して欲しくないのであった。

ナショナリズムは近代国民国家の統合原理の一つで、イデオロギー（宣伝）の部分を担当する。そうして、それはある学者のいうところによれば、「エリート集団によって宣伝された象徴・信念。または地域的、民族的、言語的に分かれた人々がすべて一致して擁護する象徴・信念」である。あれば統治者にはしごく便利であるけれども、一般国民には、無くたってかまわない。でもどうしても必要だというのなら、良いナショナリズムの方がいい。百科事典を見ると、良いナショナリズムとは、①国民の人権や自由を尊重しつつ国民国家をつくっていかうとする考え。②被支配民族が支配者の抑圧からの解放・独立を目指す思想運動、と出ている。悪いのはその反対で、国民を犠牲にして国家利益ばかりを優先させるか、他民族を侵略して植民地にしようとする思想である。良い方はシヴィック・ナショナリズムと呼ばれる。そ

それぞれの公民の立場・思想・権利を尊重するという意味である。

国民国家もナショナリズムも十九世紀以降に出現したというのが私たちの立場であるから、当然、多少ヴァリエティはあっても、それらは揃って工業社会と資本主義と民主主義を背景にしていると考ええる。そうして、詳しい説明は省くけれども、福祉国家とグローバリゼーションがその展開の過程で出てきたのであった。いま「国民国家」が抱えている矛盾がすなわちこの二つである。福祉国家をうまく立ち上げなければ、国民国家が生き続けていくのは難しいし、かといってこの先に待っている世界統合が地球上すべての人びとの完全雇用を実現してくれるかもしれないと思う前に、なによりも現在進行している経済の世界統合が悪いグローバリゼーションであり、それを後押ししているのが資本を一手に握ったエリートたちに牛耳られる一握りの強大な国民国家であるという現実がある。彼らは負け犬の貧民どもなど容赦なく見殺しにするだろう。

私たちは、もう一度、近代国民国家というものが、自分自身の力で進化し、管理し、コントロールしている社会システムであるという仮説に立ち返る必要がある。この仮説を支持するのは、パーソンズだけ

ではない。ユルゲン・ハーバーマスもニコラス・ルーマンもまた支持するはずである。そうして、その自己進化を遂げたものだけがゆるやかな世界統合機構（良いグローバリゼーション）であると信じるのである。それ以外に、いま私たちにとってもっとも緊急かつ切実な問題である福祉国家を救う道はないだろうから。

（二〇〇九年二月一〇日）